

聖書:ルカの福音書24章1~12節

説教:ここにはおられません。よみがえられたのです

はじめに

皆さんは、主のよみがえりのことを初めて聞いたときはどう思われたでしょうか。「つくりばなしでは?」、「完全に死んだのではなく仮死状態だったのでは?」とか言って疑ったのではないのでしょうか。かく言う私も、洗礼を受けてクリスチャンになってもしばらくの間、信じられないままでした。しかしパウロは「キリストがよみがえらなかつたら、私たちの宣教は空しく、あなたがたの信仰も空しいものとなります」と言っています(1コリント15章14節)。主のよみがえりは信仰の核心部分ということですから、もしよみがえりが信じられないならば、その人はクリスチャンではない。そんなことになるのでしょうか。ではイエスの弟子たちはどうだったのか。実は彼らもよみがえりを信じられなかった。今朝は、そんな弟子たちに神はどのような励ましを与えていったのか、ともに見てまいります。

1 最初の目撃者たち

1) 彼女たち

1節を読みます。「週の初めの日の明け方早く、彼女たちは準備しておいた香料を持って墓に来た。」「彼女たち」とは、ガリラヤにいたときからイエスとともに行動をとりにしてきた人たちで、イエスが十字架で息を引き取られたときも、墓に納める様子もつぶさに見ていました。日曜の朝も、その墓を目指してやって来ました。イエスが墓に納められたのは金曜日の日没が迫る頃で、安息日に入ってしまう。そこでとりあえず亜麻布でなきがらを包んで大急ぎで墓に納めました。乳香を準備してやってきたのは、やり残した処理をするためでした。

2) 墓の中に入る

七年前にイスラエルに行かせていただいたとき、イエスの墓だったのではないかとされているところを見ました。私も中に入ってみたのですが、畳三枚分くらいの広さがあり、天井はおとなが少し腰をかがめるくらいあって意外に広いと感じました。この墓を目指してやって来たのだろうかと思惟しました。

ところが墓の前に来ると墓の穴を塞ぐ石がわきに転がされていて、真っ暗な墓の穴がぽっかりとこ

ちらを向いています。墓の中に入ると、おさまられているはずのイエスのなきがらがありません。ヨハネの福音書には、てっきり誰かが盗んだにちがいないと思ひ込んだと書かれています。

3) 思い出しなさい(9章22節)

からっぽの墓を前で途方に暮れていると、二人の御使いが来てこう言います。5節から7節。「あなたがたは、どうして生きている方を死人の中に捜すのですか。ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、主がお話しになったことを思い出しなさい。人の子は必ず罪人たちの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえると言われたでしょう。」

みなさんが、この場にいたらどうでしょうか。墓の中が空っぽであったという事実でさえ理解できずにおろおろしているところです。そこへこんなことを聞かされる。私たちはからかわれているのかしら。怒りや悲しみがごっちゃになってますます混乱してしまいそうです。

二人の御使いが去っても考えがまとまりません。でもやがて誰かが口を開きます。「まだガリラヤにおられたころ、主がお話しになったこと」とは、なんのことだろうか。そうするとほかの一人が言う。「もしかしてあのことだろうか。」そうやって記憶をたどっていくと、鮮明に思い出しました。9章22節の出来事です。イエスが「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」と尋ね、ペテロが「神のキリストです」と答えると、ご自分がこれから多くの苦しみを受け、捨てられ、殺され、三日目によみがえらなければならない」と語っていた。あのときはさっぱり分からなかったけれど、もしかしてあのことだろうか。主のみことばと現実とがうまく結びつきません。とにかく半分喜びながら、でも半分疑いながら、なんとも不思議な気持ちで引き返していきます。

2 ペテロ

1) 墓の外からのぞき込む

これを聞いた他の弟子たちの反応はこうです。11節。「この話はたわごとのように思えたので、使徒たちは彼女たちを信じなかった。」

イエスの一番近くで訓練を受けてきた十一人の使徒たちでさこんな有様です。ところがペテロだけ

が墓に走って行く。ペテロだけは信じたのでしょうか。聖書にはこう書かれています。12節。「しかしペテロは立ち上がり、走って墓に行った。そして、かがんでのぞき込むと、亜麻布だけが見えた。それで、この出来事に驚きながら自分のところに帰った。」

ペテロのしていることを女性たちがしていたことを比べてみましょう。2節に「そこで中に入ると」とありますが、ペテロは中には入らず、「かがんでのぞき込み」、イエスのからだを包んでいた亜麻布が床に置かれていたのを見えています。なぜ中に入らなかったのでしょうか。せっかく墓に走ってきたのですから、ちゃんと中に入ってもよさそうなのですから、ところがどうも入るのをためらっているようなのです。数日前の金曜日、ペテロは何をしたか、思い出してください。主のためにはいのちを捨ててどこまでもついていくと告白しておきながら、主が裁判にかけラルと恐ろしくなって三度主を拒み、逃げ出した人です。それが関係している。罪の意識がうずいて、墓の中に入るのが恐ろしかったということでしょう。

2) 自分のところに帰った

こうしてペテロは自分のところに帰っていきます。それは、弟子たちが集まっていた隠れ家に帰ったという意味もありますが、もう一つある。自分の目で墓が空っぽであることを確かめておきながら、そこから一步踏み出すのではなく、古いままの信じられない自分のところに帰って行く。そうして、堅く鍵を閉ざしておびえる。そんな意味も込められています。

まことに情けないペテロではありますが、聖書はこういうことを正直書いてくれるので、私たちは慰められます。私たちだってペテロと大差ありません。主の十字架は信じられても、主のよみがえりは信じられない、あるいは確信が持てない。そんな方も少なくないと思います。教会に来て肩身の狭い思いをしていたかもしれない。でも大丈夫。安心してください。使徒たちでさえこんなありさまですから、私たちが主のよみがえりを信じられなくても当然ということです。無理に信じ込む必要はありません。ではどうしたらよいのか。すぐにそんな発想をしたくなりますが、それさえもいらない。すべて主が導いてくださいます。どのように導くのか。そのことを次に見てまいります。

3 イエス・キリスト

1) よみがえられた

日曜日の朝、からっぽの墓の前に現れた二人の御使いが語ったことばを繰り返します。6節。「ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、主がお話しになったことを思い出さない。」

目の前で起きている現実をどう説明したらよいのか。私たちは何か起こるたびに常に頭の中で考えます。女性たちは墓の中にあるべきはずのイエスのなきがらがなくなっていることをどう説明づけたらよいのか、まったくわからずに混乱していました。そこへ二人の人物は、主がよみがえられたことを告げます。だからここにいないというのです。これは現実には起きていることの事実の原因と結果についての科学的な説明と言っていていいでしょう。

2) 思い出さない

しかし科学的な説明をされることを、それを納得できるかどうかは別です。医者から検査結果を聞くときに「あなたは大腸癌です。手術が必要です」と言われても心は追いつかないのと同じです。

そこで誰も言うわけです。そんな非科学的なことを誰が信じられるか。もちろんそんな神も先刻ご存じですから、御使いは続けてこうも語るのです。「まだガリラヤにおられたころ、主がお話になったことを思い出さない。」あなたはまったく聞いたこともないことに直面しているのではない。あなたはすでに主が語っておられたことを、目にしているのだ。だから驚きあわてることはない。ゆっくりとあのとき主が語ってくださっていたことばを思い起こさない。そうしたら、目の前のことは主のことばのとおりだということが次第に理解できるでしょう。これが主の励ましです。

3) 後から思い出していく

もう少し具体的な話をします。私は牧師だと名乗っていますが、先ほども言ったように、洗礼を受けてしばらくは主のよみがえりは信じられないままでした。それが今はどうして確信を持てるようになったか。牧師になるくらいだから、信仰で確信を持つようになったのでしょうか。なんとなくそう思っているかもしれませんが、自慢ではありませんが私にはりっぱな信仰などありません。

ではどうしたか。結論から言うと教会の皆さんに教えられたのです。この教会が建てられてからこの四月でちょうど二十年になりました。この二十年間、いろいろありました。最も大変だったのは、教会が建てて数年後のことですが、教会の皆さんがぶつかり合っ一つになれないときでし

た。内心これは空中分解するのではと覚悟したこともあった。それが今このとおりに一つとなっていきました。これは強調したいのですが、私が何かをしたわけではありません。何かしようにも外にはじかれるくらい無力でした。ところがあることが起きたとき、一人の方が皆さんの前で悔い改めてくださったことをきっかけにして、次から次へと悔い改めが起きていく。そうして気がついたら、昨日までぶつかっていた兄弟姉妹が和解して結び合わされていた。これはもう聖書に書かれているとおりのことだったので、こちらが驚いた。そこで私は教えられたのです。教会で起きていることが聖書に書かれているとおりにならば、主のよみがえりも確かにあったことに違いない。

人が集まればたとえ教会であっても、何かしらのトラブルは起きます。そのとき人の知恵やわざで解決しようとしたら、結局いつかは倒れておしまいだったでしょう。でも、いまこうして私たちは心一つにして主を礼拝できているのはなぜか。ばらばらになりかけていた弱い私たちが、結び合わされていったのはなぜか。理由はただ一つ。主が生きておられるからです。

このように私たちは聖書を読んでその時はなんのことかピンとこなくても、後から思い出していく。そうやって主のみことばが正しかったということを確認しながら歩いていきます。牧師の役割は何かと問われたなら、私はこう言います。教会の中で主がどのように働いておられるのを目撃し、それが聖書のみことばのとおりであることを皆さんにお伝えしていく。それが牧師の役割である。みなさんと一緒に思い出していくということです。

信仰の大先輩たちは、この主が与えてくださる永遠のいのちを信じて、召されていきました。日曜の朝、墓の穴からよみがえられた主の御名をあげたいと願います。